創刊60周年を迎えた「早稲田スポーツ」

はじめの一歩
これからの百歩

はじめに

商業新聞が苦境に立っているといわれる。確かに、電車で新聞を読んでいる人を見かけなくなった。学生から、新聞を購読しているという話はきいたことがない。誰もが指摘していることだが、明らかに情報はネットで収集する時代になっている。

朝日新聞と読売新聞がニュースサイトを開設したのは、１９９５年だった。他紙も追随していくのだが、ネットが発達していくと同時に紙の新聞は衰退し、徐々に部数を落としていることは周知の事実だ。

ニュースを入手する手段や情報を発信する作業は、紙という「実物」から「実態」をつかみづらいネットに移行している。

そして、情報発信の方法はＨＰ（ホームページ）さえ押しのけて、ツイッター、

フェイスブック、インスタグラムなど、ＳＮＳが主流になりつつあるのが現状だろう。

『早稲田スポーツ』がホームページを開設して、軌道に乗せたのが、２００１年頃と『早稲田スポーツの50年』（早稲田スポーツ50周年記念書籍刊行委員会編）にある。

それが今や、ホームページの閲覧数（ページビュー）が一日で平均1万５０００回。ツイッターのフォローワー数が約2万５００人、インスタグラムのフォローワー数が約２５００人。日に日に、閲覧者を増やしているという。一方で、新聞の定期購読者は３００名ほどに過ぎない。

商業新聞と同じように、『早稲田スポーツ』を取り巻く環境も、大きく変わっているのだ。

話は変わるが、ラグビーワールドカップで日本はベスト8に進出した。プール戦では、アイルランド、スコットランドの強豪チームに勝って、無敗の４連勝。

Aプール1位で、日本ラグビー史上初めて準々決勝に進むという快挙だった。

スコットランド戦でMVPに輝いたウィングの福岡堅樹選手は「ベスト8に行って、歴史を作ろうと思っていた」とインタビューに答えた。

リーチ マイケル主将も翌日の会見で「準々決勝も勝って、新しい歴史を作りたい」と語った。

ラグビーの大西鐵之祐（当新聞会第2代会長）や早世した宿沢広朗（元早大、元日本代表監督）と平尾誠二（元日本代表監督）は、日本がワールドカップでベスト8に残るということを、はたして想像していただろうか。

スポーツには魔性の力があると思う。その力が、常に新たな歴史を作っているからだ。

ラグビーは第3回ワールドカップではニュージーランドに145点を取られ、まったく歯が立たなかった屈辱の歴史がある。どんなスポーツでも歴史を振り返ってみれば、栄光の陰には、必ず挫折があった。

『早稲田スポーツ』は、学生スポーツのフィールドではあるが、アマチュアスポーツの歴史の現場に立ち会い、少し誇張した言い方をすれば、その栄枯盛衰を見続けてきた。

１９８２年、野球部の大学創立１００周年優勝は７季ぶりの優勝だった。それ以後、再び15季、優勝から遠ざかるのだ。ラグビーが１９８７年、大学日本一になったのも11年ぶりで、東芝府中を倒して日本一にも輝いた。箱根駅伝は２０１１年、ルーキー大迫傑や中島賢士主将ら上級生の活躍で総合優勝したが、前回の優勝は93年まで遡る。早大の運動部にもそれぞれに、苦難のときがあり、それを乗り越えたところに、新たな歴史が作られてきたのだ。そうした栄光と挫折の一瞬一瞬を『早稲田スポーツ』はしっかりと取材し、記事にし、報道してきた。

学生スポーツ新聞は明治大学体育会機関紙の『駿台スポーツ』の創刊が53年。『明大スポーツ』と改称したのが56年で、『早稲田スポーツ』はこの「明スポ」にならって59年に創刊された。当時の話は『早稲田スポーツの50年』に詳しい。

そして、『早稲田スポーツ』は２０１９年、創刊から60年目を迎えた。

「早スポ」的には、スポーツに魔性の力があるのではなく、スポーツに「触れること」には魔性の力があると言えるだろう。スポーツに関わると、その魔性に冒され、熱中症にかかるのだと思う。スポーツ熱中症にかかった記者たちが、その熱さを選手にぶつけ、熱い記事を書き、熱い読者に読んでもらうということを60年も繰り返してきたのだ。

『早稲田スポーツ』創刊を発案したのが松井盈初代編集長で、松井が最初に「新聞を作ろう」と声をかけた相手が、２代目編集長の西川昌衛だ。

西川の「はじめの一歩」の記憶は還暦を迎えた今だからこそ語り継ぐべきことだろうと考えた。西川のほか、創成期の編集長などに集まっていただき、〝肉声〟を収録し、第一部を構成した。

そして第二部では、第60期の現役３年生に集まってもらい、日々の活動ぶりを聞いた。その声を聞いたとき、おそらく「古き時代」の先輩たちは、信じられな

い思いにかられるだろうと思う。逆に言えば、第一部の話は現役生に、どんな感想をもたらすのか、楽しみでもある。

時代が劇的に変わっていても、新聞会は変わらず、成長、発展しながら60年の歴史を重ねてきた。このことは、今も昔も「熱中症」にかかっている若い人たちが途切れることなく、「早稲田スポーツ」の扉を叩いてきたということだろう。「早スポ」の今を知ることは、ＯＢ・ＯＧにとっても大きな喜びである。彼らの活動が、「これからの百歩」への知的財産となって、引き継がれていく。

この記念誌は、早稲田スポーツ新聞ＯＢＯＧ倶楽部の会員７７０人に、今はどのように新聞を作っているのか、インターネットによって、情報をどんな形で発信しているのか、それを知っていただけるだけでも、価値のあるものだと自負している。ぜひ、お読みいただきたい。

（本文含め敬称一部略）

目次

はじめに ―― 2

第一部　はじめの一歩　OB座談会　60年も続いたのは「夢のようだ」 ―― 11

明治に行った「彼女」へのライバル心が創刊の原点？
苦労の末に集めた6人の創刊メンバー
得体の知れぬ新聞に、なぜ入ろうとしたのか
女子部員は1年にひとり。少数精鋭主義を貫いた？
原稿の書き方も「割り付け」も全く知らずに
一難去ってまた一難、「こんな新聞は早稲田の恥だ！」
大胆にも、体育実技の先生に2万円の借金を申し入れる
授業料で印刷代を立て替え。やがて「倒産」の危機に
最高部数論争勃発！　10万部？　1万部？
早慶戦特集号を出す、出さないで決闘寸前
光っていた伊藤さんの写真。カメラはいつも質屋にあった
「スポーツ年鑑」発行を提案し、全部員に反対されたが
道路の両側をシラミ潰しに。原始的な広告取り作戦
箱根駅伝もラグビーもマイナースポーツだった

第二部　これからの百歩　現役座談会　令和元年、早スポの日常 ―― 109

１８０人の大舞台は女性優位
スポーツについて深く語れる場
編集長決定と合宿模様
編集会議と企画会議
38年ぶりに印刷所変更
カメラレンズは数十万円の純正品
箱根駅伝とスポーツランキング
帰宅途中、スマホで原稿執筆
選手との温かい交流
ＳＮＳをフル活用
新聞作りは自己満足でいいんだ

付　録　早稲田大学体育各部記録　２００９年―２０１９年 ―― 167

おわりに ―― 187

早稲田スポーツ

（1）創刊号　　早稲田スポーツ　　昭和43年11月17日（水）

春秋慶応を連破！ 早慶戦

惜しくも二連覇逸す
学園ナインの健闘空し

秋の六大学野球

発刊によせて
大隈信幸

私学とスポーツ

学生と熱情
福田宏

祝 創刊号
法学部前 KY商店 (34) 3491

時の人
野球部主将
木次文夫

祝 創刊号
文学部前
永田運動具店

玉沢スキーの魅力！
北海道の優良材 価格が安い 責任保証
スキー・スケート売出し
玉沢

アウトライン

前野書店

スキーシーズン来る！
学割（早大生）サービス
スキー・スケート用品
ノヅ

早稲田大学御用
スポーツ用品
スポーツ・ハーバス
スキー・スケート用品
山の用品全般

創刊号（昭和43年11月17日発行）の第1面

第一部　はじめの一歩

ＯＢ座談会　60年も続いたのは「夢のようだ」

●出席者

西川昌衛（第２代編集長：63年教育卒・獨協高：日本信販）

堤　哲（第３代編集長：64年政経卒・早大学院：毎日新聞）

堀　健雄（第３代主　務：64年商卒・都立板橋高：日本水産）

中津海光夫（第４代編集長：65年政経卒・札幌西高：大成建設）

江口　拓（第５代編集長：66年政経卒・都立西高：講談社）

斎藤　禎（第６代編集長：67年文卒・都立小石川高：文藝春秋社）

これまで、「早稲田スポーツ」の創成期に関する話は、40周年記念誌、45周年記念紙、50周年記念誌の中で、創刊編集長だった松井盈をはじめ、何人かの人が書いてきた。しかし、そうした紙誌を保存している人はそれほど多くないと思われる。

さらに、当時の人たちも高齢になり、今後は事実より、伝説がまかり通る恐れもある。

そこで、創刊から5年の間に在籍した6人のOBに集まってもらい、お互いの記憶をすり合わせ、「事実を残す」という意気込みで、座談会を開催した。

座談会とは別に、第2代編集長の西川昌衛が、「自分史」を執筆する中で、「『早稲田スポーツ』創刊の頃」という22万字を超える詳細な「歴史の痕跡」を書き上げている。

本書は、その記述を基にしながら、より具体性、客観性を高めるため、座談会で確認し、西川の原稿だけでなく、過去に書かれた文章を一部、挿入した。

江口　50周年記念誌の第1部を私が書いたこともあり、創刊から5年後までのことは頭に入っていますので、今回、司会をさせていただきます。まずは、50周年誌にはなかった話から進めていこうと思います。

今の時代と、私たちの時代とでは入部の理由、動機が違うと思いますが、西川さんが入部される際、決め手になったのは何ですか。

西川　話すとしたら、新聞を作った動機だとか、仲間をどう集めたとか、そういうことかな。それなら、私が自分史というか、早稲田スポーツ新聞会への「遺書」のつもりで書いた文章があるので、それを見てもらったほうが早いかもしれない。

明治に行った「彼女」へのライバル心が創刊の原点？

《昭和三十四年四月、早稲田の教育学部国語国文学科に入学した。二ヵ月もすると、自然に話をする仲間が絞られてきた。親しくなって話をする仲間の一人に小柄で元気の良い松井盈

（神奈川・緑ヶ丘高）がいた。

ある日、授業が終わると、突然、彼が「実は相談がある」と話しかけてきた。まだ大学生活になじんでいない、五月の終わりか六月初めだった。

松井は開口一番「新聞を作りたい。ついては相談に乗ってくれないか」と言った。そして、「明治には立派なスポーツ専門の学生新聞がある。学生スポーツにかけては早稲田のほうが先輩格なのに、なぜ、早稲田にスポーツ新聞がないのか不思議だ。ぜひ一緒にやろう」ということだった。

このとき、松井は自らの構想を真剣に話したのだろうが、あまりに唐突な話で、その真意が自分には十分伝わってこなかった。

彼が言うには、高校時代に付き合っていた女性が明治に行き、「明大スポーツ新聞部」に入った。彼女の話を聞くと、「明大スポーツ」の活動が実におもしろそうだ。毎週、学生スポーツを取材し、記事を書き、新聞を作っていると言う。この話を聞いて、松井は早稲田にはない学生スポーツ専門の新聞を作ってみたい、との気持ちが高まってきたのだ。しかし、新聞を一人

で作れるはずもなく、仲間をできるだけ多く集めたい、と言う。

松井がなぜ自分にこの壮大な構想を持ちかけてきたのかは分からない。自分は中学時代、3年生のとき、1年だけ野球部に所属し、田舎の中学校の試合に出ただけのスポーツ経験しかない。ましてや、新聞制作の経験は全くなかった。強いて思い出せば、中学時代にクラスの中で壁新聞みたいなものを作ったことだけであった。

そんなことを松井に伝えると、彼も高校で軟式庭球をやってはいたが、新聞制作の経験はないという。二人とも新聞作りは未経験にもかかわらず、大学でスポーツ新聞を作ろうとした発想には「怖い物知らず」の何か突き動かされるものがあったのだと思う。

松井にとって、仮にそれが明治大学に行ってしまった女性の想い、あるいは彼女への見返し、という目的があったとしても、彼の顔には真剣みが溢れていた。話をしていくうち、彼の熱意のせいか、このアイデアに乗っても良いかなと思うようになった。

後で分かったことだが、松井は自分の前に、クラスの何人かに、この話を持ちかけていた。しかし、全くの無反応か、拒絶反応ばかりであったという。まともに話に乗ったのは自分だけ

だったらしい。》

（以下、《》内の文章は、すべて西川の「『早稲田スポーツ』創刊の頃」を加除して引用した）

苦労の末に集めた6人の創刊メンバー

西川　私は「近代文学会」というサークルに入っていたから、はじめのうちは、本気で聞いてなかった。でも、彼の話を聞いているうちに、だんだん引き込まれてきてね。こいつが言うこともおもしろそうだ、乗ってみようかな、という気持ちになっていったんだね。

そうして、頻繁に会うようになったのだけど、毎日のように、「決断してくれた」って、催促するんだよ。私は逆に「他にも声をかけたの？」と聞いたんだが、松井は、「声をかけたけど、断られた」と、元気がなかった。私が返事を保留にしていたので、期待されていたんだろうね。

《結局、自分は松井の構想に賛同し、自分からクラスで勧誘活動を始めた。もちろん、全員と親しいわけでもなく、比較的話がしやすかった人たちに誘いの的を絞った。

しかし、大学に入学してまだ間もない頃であり、ほとんどが気乗り薄だった。希望に燃えて大学に入った学生に対して、突然、わけも分からない新聞の創刊に加わらないかというほうが、おかしかったのかもしれない。大学でスポーツ新聞など作っても、成り立つわけがないというのが、みんなの一致した意見だった。

ようやく、二人の熱意が実って、参加だけはしてみよう、という人が出てきたのは勧誘を始めて1ヵ月月近く経ってからだった。夏休みに入る少し前に、私と松井を含めて、六人が集まった。いずれも、英語の授業のとき、近くに席をとっていた者ばかり。松井、西川に加え、東京出身の山崎茂（志村高）、神奈川の原田貞雄（横浜日大高）、福岡の福山龍介（三池高）、福井の本多統（丸岡高）の六人。みんな国文科C組のクラスメートである。》

中津海　45周年のとき、記念の新聞を出していて、そのとき、松井さんに創刊時

創刊メンバーにとって、最後の箱根駅伝観戦。1963年1月3日、早大の定宿「武蔵屋旅館」の前で、前列左から、宇野英雄、西川昌衛、前日５区を走った中村宏（１年・南山高。区間９位）、松井盈、後列同、山崎英夫、中野邦観、江口拓。

1963年３月、創刊メンバーもいよいよ卒業。金城庵で行われた追い出しコンパ。前列左から、４年の山崎茂、松井盈、西川昌衛、宇野英雄、（中野邦観は欠席）、中列同、３年の堤哲、堀健雄、鈴木克宣、佐々木勝衛、２年の奥本和通、中津海光夫、後列同、２年の高橋清輝、３年の大熊千種、山崎英夫、１年の昆祐一（自転車部の推薦入学だったが、なぜか早スポに短期間在籍していた）、江口拓、小黒哲夫。これが、創刊４年後、３月時点の全部員だ。

の話を聞いているけど、西川さんと同じようなことを話してますね。残念ながら、松井さんは亡くなったから、生き証人は西川さんだけになっちゃった。

西川　松井はとにかく、凄い勢いで突き進むわけですよ。この調子でいくと、脱落者が出るだろうと思っていたら、案の定、夏休みが終わった頃から、会議に出てこない人が出てきた。部員をもっと集めないと、継続できないと思ったね。だから、新入部員勧誘には力を入れましたよ。

得体の知れぬ新聞に、なぜ入ろうとしたのか

江口　とはいえ、当時、「早稲田スポーツ」はほとんど知られていなかったでしょ。堤さんは、なぜ入部しようと思ったんですか。

堤　私は幼稚園の頃から親父に連れられて、神宮球場によく行ってたの。親父は慶応で、実は、国会図書館の慶応の卒業生名簿がネットで見られるんだよ。それで、検索したら、上野精三さん（静岡中のエース、慶大に進み、監督も務めた）

と同級生で、水原茂（高松商業から慶大、巨人）とも近いところにいたということがわかった。それで、親父が神宮に頻繁に行っていたんだと思う。だから、学院に行くまでは、慶応の試合を見に行ってたということですね。

学部に進んだある日、大隈さんの銅像の脇で、「早稲田スポーツ」を10円で買ったら、そこに新入部員募集と書いてあったんだよ。ここなら、野球をタダで見られるかもしれないと思って、すぐ体育館に入部の申し込みに行った。

西川　堤は、最初に入部して来たんだよ。

堤　（西川と同学年の）宇野英雄（理工・挙母高）さんも中野邦観（政経・日大二高）さんも、私より後に入ってきた。その年の終わりぐらいだよね。

堀　私も、「早稲田スポーツ」が売られてるのを構内のどこかで見たんだね。私は野球だけでなく、スポーツは、するのも見るのも好きだったから、試合を見られるというのが一つ。それと、新聞作りに興味があった。堤と一緒に毎日新聞にアルバイトに行ったとき、堤は記者になりたいって言ってたよ。私も口に出さな

かったけど、内心、記者なりたいなと思ってた。そこで、記者たちの勤務ぶりを観察してたわけ。そしたら、いつ帰るともわからない、ソファでゴロゴロしていたり、突然、起き出して仕事したり、私に言わせりゃ、ルーズなんだよ。こういう生活は無理だなと、新聞記者はあきらめた。体育館の片隅にあった机で、入部の申し込みをしたことは覚えてますね。私の場合、入部の動機は、新聞作りとスポーツが好きだからという、真っ当な理由ですよ（笑）。

堤　私は、最初は原稿なんてうまく書けなかったから、1面の「アウトライン」を書くコラムニストは堀さんですよ。

堀　堤から、お前が書けって言われたから。ほんとは彼のほうが書けるんだろうけど、譲ってくれたんだと思う。しかし、いつも題材に困っていたね。テーマの取り上げ方、書き方は、朝日の「天声人語」を見ながら、勉強していた。今も「アウトライン」は続いているけど、社説のような位置づけだった「主張」というコラムはなくなっちゃったね。

江口　中津海さんは最初、「山の会」に所属してたとか。

中津海　大学に入ったら、真っ先に山岳部に行こうと思った。兄貴が大阪大学で山岳部に入っていて、大学では兄貴に負けずに山岳部に入ろうと、決めてた。英語が得意でね、ほんとは東京外大に行きたかったの。第1志望は外大で、現役のときは1次に受かって、浪人すれば入るなと思っていたんだよ。浪人して、商社にいきたかったので、早稲田の政経も受けてみようかと。そして、合格したけど、二期校の受験にはまだ1ヵ月ぐらいある。そんなとき、合格した友だちはみんな遊んでいて、「中津海も早稲田に受かったんだから、もういいんじゃないか」と言う。それで、私も「まあ、いいか。早稲田で山岳部やろう」と、ふん切りをつけた。山岳部の部室には、4、5回行ったけど、ずっと閉まっていて。

堤　60年11月に富士山で新人部員を対象にした新雪期の合宿で雪崩にあって遭難、死者4人、重軽傷者15人を出し、休部中のとき。9合目から5合目まで標高差で1000メートルも流された。同級生の1人は、たまたま右手首が雪面から出ていて、

登山は早稲田スポーツの「定番」行事だった。写真上、昭和37年、三つ峠（1785m）登山者（中野邦観、山崎茂、奥本和通、逸見素子、山崎英夫、村田久芳、堤哲、西川昌衛、中津海光夫、鈴木克宣、中央に松井盈）。下右、昭和38年、赤岳（2899m）登山者（中津海光夫、大熊千種、佐々木勝衛、堤哲）、左、昭和39年、乾徳山（2031m）登山者（（中津海光夫、高橋清輝、小黒哲夫、宮坂裕次、山本隆一、江口拓、宮田博子、益子保夫、中島勝男、高木貞男、斎藤禎、奥本和通）

掘り出され助かったと言っていた。

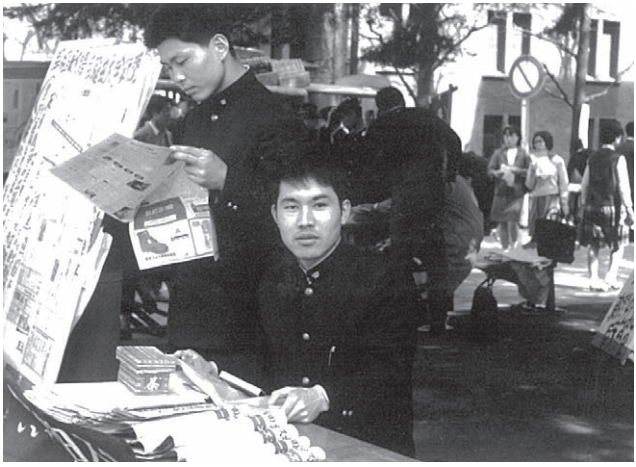
中津海　遭難して休部中だということを知らなかったからね。結果的には、半年で再開してるんだよ。夏ぐらいに部室を訪ねていれば、山岳部に入ったかもしれない。政経の新聞学科だったから、新聞に興味があるのと、スポーツも好きだった。それで、どこかで新聞を売ってるところに出くわしたんだね。

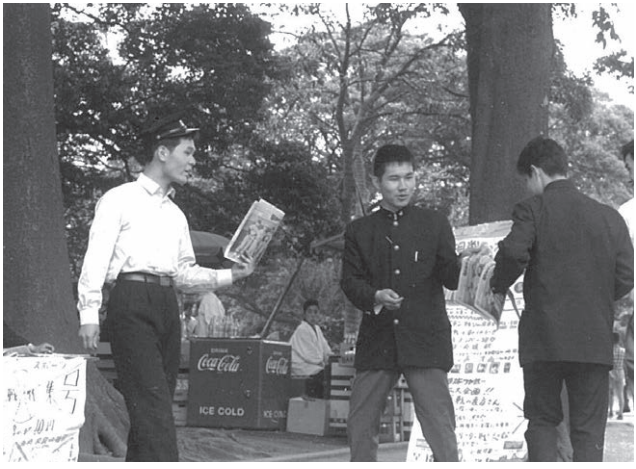
西川　みんなの話を聞いていると、大学構内で新聞を売っているのは、勧誘効果が高いんだね。

中津海　体育館に顔を出したら、西川さんか松井さんがいたのかな。

西川　山崎がけっこう、活躍してたんですよ。立て看板を学生部から借りてきて、模造紙に書いた新人募集のポスターを貼ってね。

中津海　山岳部がだめなので、山の同好会に入って、しばらく二足のワラジを履いていたけど、早稲田スポーツの人のほうが優しかったし、頼りにされ始めちゃった（笑）。優しくされた、頼りにされた。広告取りも一生懸命にやって、





大学構内での新聞販売光景（1964年）。新聞を立ち読みしているのは、翌年、合気道部主将になる江原哲。買ってくれたのかは不明（写真上）。早慶戦特集号も、大学構内と同じように立て看板、机を出して販売した。

けっこう楽しかった。それが、最後まで続いた理由かな。入った当初は、もっとメンバーがいたと思うけど。

堀　我々のときは、販売の机を教育学部の横、大隈銅像の近くに一つ、裏門（西門）のほうに一つ出していた。

西川　夜の8時までやってたね。当時、二部に運動部員が多く、練習が終わって、夕方に裏門から入ってくる。その選手たちに売ろうという目算で、授業が終わる頃まで、机を出していた。

中津海　早慶戦特集号のときは、文学部でも売りましたよ。女子学生はほとんど買ってくれなかったね。

女子部員は1年にひとり。少数精鋭主義を貫いた？

江口　部員数は現在に比べると、格段に少なかった。

西川　途中で入ってきたり、辞めたりして、出入りも多かったからね。最後まで

残ったのは5人。さっき話に出た、宇野、中野、山崎と松井、そして、私。

中津海　私のときは、最終的に3人。奥本和通（法・広尾高）が最初からいたような気がするな。高橋清輝（文・富士森高）と逸見（現姓・上）素子（文・日本女子大付属）さんは遅れて入ってきた。女性部員は彼女が最初でしょ。

堤　逸見さんには、西川さんが、「お父さん（逸見廣教授）に単位が取れてるかどうか聞いてくれない」と頼んだことがある。そういうことはダメですって断られた（笑）。

西川　机にあるはずだから見てくれと（笑）。

断られたので、期待しないでいたら、「65点でした」と言われ、ギリギリ及第点だった。

中津海　彼女は、1年で辞めちゃった。

堤　逸見さんともう一人、粟村頼子さんという女性がいた。

中津海　私の同期？

堤　そう、一緒の頃に入ったけど、学年は1年上かな。途中で来なくなっちゃった。

斎藤　当時は、早慶戦のチケットがそう簡単に手に入らなかったから、早慶戦を見られるというので、入ってくる女性がけっこういましたよ。早慶戦が終わると、辞めちゃう。

江口　確かにいたね。私のときも、女性二人で一緒に入ってきて、早慶戦のあと、二人とも来なくなった。女性は宮田（現姓・小松崎）博子（教育・新居浜西）さんだけ。最後までいた同期は宮田さんのほか、宮坂祐次（商・諏訪清陵高）、小黒哲夫（教育・大田原高）、中島勝男（理工・早大学院）ですね。

斎藤　うちらの女性は、飯島（現姓・石渕）田鶴子（教育・高崎女子高）さん。

西川　大熊（現姓・岡田）千種（文・東洋英和短大）さんは、誰と同期？

堤　東洋英和の短大を卒業して、3年生で文学部美学専修に入ってきて、我々と一緒にやったあと、もう1年、中津海たちとやった。

江口　女子といえば、宮田さんが、女子運動部員の特集記事を書いていますが、昭和38年、男子部員１５２５名に対し、女子は１１６名しかいない。そもそも早稲田には女子学生が少なかったこともあるけど。

堤　私のときの特集（昭和36年）では、39部で、男子１７９３名、女子１２２名。現在は44部で、男子が約２６００名、女子は９００名近い。時代は変わりましたよ。

堀　「早スポ」も今や女子のほうが多いよね。

中津海　2年上に松井さん、西川さん、宇野さんで、1年上に堤さん、堀さん、山崎英夫（法・春日部高）さん、佐々木勝衛（法・野沢北高）さんで、みんなまじめなんだな。私とは違うなって、感じてた（笑）。本当は運動部に行きたかったのか、付き合いが運動部の人ばかりで、それが早稲田スポーツに入って、一番良かったことですね。先輩たちとは、早スポでの生き方がちょっと違ったかな。

江口　それは新聞作りの熱意の差ですよ。

中津海　熱意か（笑）。

江口　創刊時の熱意は徐々に薄れていって、我々のときは、とりあえず、出さなきゃいけない、出せばいいだろうという雰囲気になっていた。

堤　私の頃は、締め切り前日、甘泉園に泊まって原稿を書いてた。原稿合宿だよ。

江口　私たちもそうです。50周年のとき、逸見さんに聞いたら、甘泉園の泊まりができないので辞めたと言ってました。お嬢さんがあんな汚いとこに泊まれるわけがない。お父さんから何を言われるかわからないと。学生服を着た男が何人もいるんだから、確かに怖いよ。

中津海　甘泉園の中にあった甘泉寮ね。ここは運動部の短期合宿所になっていたので、ごつい運動部員もいたんだろうね。宮田さんは泊まったの？

斎藤　近くに下宿していて、出入りはしてた。

中津海　大熊さんも泊まってないでしょ。

西川　逸見さんは女性で貴重だった。もっと優しくしてれば、辞めなかったかな。

甘泉園が問題なら、考えようもあっただろうに。

江口　甘泉寮は、ぼくらが卒業して、すぐなくなりましたね。今は区立の甘泉園公園。

西川　テニスコートが何面もあって、軟式庭球部が使ってた。学生にはなにかと便利な施設だったと思うね。

堤　雄弁会が、必ず演説してたよね。

西川　森の中だからね。

甘泉園の「泊まり」の様子は、小黒哲夫が昭和40年1月発行の（第48号）の編集後記に書き記している。

毎月、発行の二、三日前、記事の割付、整理のため部員一同、甘泉寮で一夜を明かす。でも仕事はなかなか手につかず、雑談にふけることしばしばである。夜中にアミダくじをやって、

食料を買いに馬場駅まで歩いた者もいる。和気あいあいのうちに仕事にとりかかるかと思えば、皆センベイぶとんにくるまって寝てしまう。翌日は、授業だの何だの理由をつけてさっさと引き上げてしまう。寝坊な者だけが残って、部屋のそうじから、新聞社に持っていく原稿整理をやるのだ（注・原稿を書きおわると、すぐ寝てしまう人が多く、割付作業は朝からになった）。全てが終わるのが夕日どきである。犠牲的部員が二、三人新聞社に行って「遅い！」とドナられてくる。

（中津海編集長時代と比べても、新聞作りの緊張感が薄れていたのが、よくわかる）

江口　私は「早稲田スポーツ」を高校のときに知って、入ろうと思ったんですよ。丸善に勤めていた姉貴が、早稲田祭に行って、プログラムを持って帰ってきたの。それで「ローマオリンピック展」を早稲田スポーツ新聞会がやってると知って、この会は、自分がやるしかないなって（笑）。高校3年のとき。

堤　創刊2年目、私たちが1年のときから早稲田祭に参加していた。

江口　ただ、うちは国立大にしか行かないような学校だったから、早稲田に行くとは思わなかった（笑）。でも、「早稲田スポーツ」に入りたいという気持ちは浪人中もずっとあって、勉強などほとんどしないで、野球、バスケット、水泳、陸上、ラグビーなど、やたらスポーツ観戦をしてましたね。親はお金がないから、国立じゃないとダメだと言うので、早稲田の受験料、入学金すべて姉貴が出してくれたのかな。それで、入学して、即、訪ねた。

堤　編集長は私だよね。

江口　そうです。たぶん、私が最初に入ったと思う。

中津海　江口はそういう気持ちがあったんだね。甘泉園でやってるときに、私なんかと違うんだ。制作過程というか。なんか、最初は何もやらないんだよ。夜中まで。私も編集長だから、早くやってよと催促するんだけど、やらなくて、朝起きるとできてるんだ。こいつにはかなわないなと思ったよ。斎藤もそうだった。

そういう世界に行くやつはね。

斎藤　ついでに、甘泉園の話を付け加えさせてください。１９６４（昭和39）年の春、石井藤吉郎さんが野球部の新監督になって、それまでの低迷を一挙に破り、早稲田は優勝。「早スポ」の一面は、もちろん野球で、江口さんの担当でした。甘泉寮での入稿作業で、江口さんはほかの人たちの原稿にさんざん茶々を入れてから、朝方になってやっと自分の原稿に取りかかったの。ところが、江口さんは編集長だから、ほかの作業もあり、ついに時間がなくなってギブアップ、「続きは、禎ちゃん書いておいてよ」と割付表を放り出してしまった。江口さんのあとを書くのは辛かったけど、なんとか恰好を付けて、仕上げたんですよ。新聞が出た後、クラス会があって、クラスの仲間が「野球の優勝についてしゃべって」と言われたので、「早スポ」の一面記事を全文自分が書いたような顔をして読み上げたところ、「気になっていた」女性が一生懸命聞いてくれたんで、記事の威力に感激した覚えがあります。

7のラケット

早稲田スポーツ

6月号

待っていたこの日

気力の逆転優勝

六大学野球 7年ぶり21度目

主張

強くならなくては

「うれしい、の一語」

優勝のほうが

春のリーグ

監督が替わったとたん、7シーズンぶりの優勝を遂げた
（昭和39年6月22日号）

1965年秋の早慶戦、優勝後、選手と応援部が一体にとなって、「早稲田の栄光」を歌った。フェンスも低く、防球ネットもなかったので、選手たちは、グラウンドから「ひょい」とスタンドに上がってくることができた。

江口　それはちょっと記憶違いかも。続きを書いてくれ、ではなく、トップ記事を書いたあと、残りの記事を含めて、一面全部を任せたんだよ。優勝した瞬間に、「待っていたこの日」というタイトルが浮かんで、その気分を表す原稿を書いたら、もう野球はいいや、早慶バスケットを書こうって。そういう禎（斎藤）さんの入部動機は？

斎藤　高木貞男（理工・小石川高）が呼んだの。高木が先に「早稲田スポーツ」に入っていて、偶然、早稲田キャンパスで高木を見つけ、「理工学部なのに、なんで、ここにいるの」と聞いたのが、運の尽きだった（笑）。高木がどこかに書いてるけど、「私の最大の功績は斎藤を引っ張ったこと」だって（笑）。

西川　もうひとり小石川がいたね。

斎藤　白根義幸（商）。二人とも、途中で辞めちゃったので、最後は、山本隆一（理工・北園高）、藤沢俊（商・呉三津田高）、益子保夫（法・大田原高）、畑中宗治（政経・津）、文屋隆夫（法・札幌南）と飯島さんです。

中津海　常時活動してたのは、3学年合わせて10人くらいだったかもしれないね。少数精鋭主義だったということにしておこう（笑）。

原稿の書き方も「割り付け」も全く知らずに

時系列的には前後するが、ここで、もう一度、西川「自分史」に戻ってみると――。

《「早稲田スポーツ」の印刷をどこでやるかについては松井が新聞発行の構想を言いだした時には全く決まっていなかった。頭には「新聞発行」の4文字だけが入り、発行に至る作業のことは、ほとんど入っていなかった。そのうちに、松井の母親・澄子さんの関係から、横浜・馬車道にあった神奈川新聞社が外部印刷を行っているという話を持ってきた。神奈川新聞社では本体の新聞印刷をするのとは別に、外注部門を設置してあり学生新聞や各種団体の新聞などを請け負っているという。

当時、京浜東北線の終点は桜木町だった。桜木町駅から神奈川新聞社までは歩いて10分ほど

の距離だった。

創刊号の作業は早稲田諏訪町の福山龍介の下宿や西武線沿いの簡易ホテル（注・当時、連れ込み旅館と言った。今ならラブホ）を使って行った。数日がかりで、場所を転々としながら、徹夜の作業が続いた。「やっとできた」と、みんなで喜んだものの、身体は疲れ切っていた。松井と自分と山崎の3人で創刊号の原稿等一式（原稿と割付表）を神奈川新聞に持っていくと言うと、他の3人も一緒に行くと言い出し、結局6人全員で行った。これで「早稲田スポーツ」の創刊号が発行できると思うと感無量だった。このとき、部員みんなの頭からは授業やアルバイトのことは消えていたに違いない。

神奈川新聞社に着いて、原稿を出したところ、すぐに外注印刷責任者の式井さんから呼ばれた。

「全く駄目だ」と言う。まず、新聞制作の基本である「割り付け」（レイアウト）が全くなっていない。さらに、「見出し」がだめだ。そこで、さっそく式井さんの講義が始まった。いわゆる見出しが段数のところで終わる「腹切り」状態と、見出しが漢字ばかりの「墓場見出し」

が多すぎるというのだ。新聞制作の基本を知らない私たちだったので、みんな素直に式井さんの話を聞くことができた。その後、新聞制作のレクチャーは式井さんの部下の戸塚さんに移った。戸塚さんは、いちいち自社の新聞を持ってきて見本を示しながら指導してくれたものである。

式井、戸塚両氏は頭を抱えていた。今後どうなるかと心配していただろうと思う。ただ、私たちは教えられた通りにやるので、まるで無垢の紙に絵を書くようなものだと、教えがいもあったに違いないと、今、勝手に想像している。

そんな中で、私たちも苦慮の末に独自のノウハウを獲得したことがあった。もちろん、プロの印刷会社の中では全くのルール違反である。徹底的に印刷知識を叩き込まれた私たちは次第にズルさも覚えた。割付表を出し、組版ができてもまだ修正部分がでてくる。これは、私たちの原稿と割付の悪さのためである。こんなとき、面と向かって戸塚さんに訂正を言い出しにくい。しかし、納得できない文章のままでは新聞を出せない。すでに何回も印刷所の中へ入っていた私たちは活字を拾う工員さんとも顔見知りの仲になっていたばかりか活字の拾い方まで教

えてもらっていた。

急ぎで原稿修正をしたいときは、戸塚さんを通さないで、直接工員さんに活字組みの依頼に行った。工員さんも手が空いているときは、すぐに活字を拾ってくれるが、手が離せないときもある。そんなときには、工員さんに一声かけて原稿を書いた本人が活字を拾って小さな組版を作ってしまうのだった。せいぜい手のひらに乗る程度の組版である。それ以上の量の文章はとても素人には手におえない。自分が書いた文章が鉛の活字で組まれて、自分の手の中に納まっていると思うと、不思議な感じがしたものだ。》

江口　今はコンピュータで作る時代ですが、何も知らないでスタートしたのだから、新聞作りの苦労は相当あったはずですね。

西川　組版というのが、ピンセットで鉛の活字を拾うんだよ。学生新聞の仕事は後回しにされて、遅くなるというので、自分たちで組んだこともあったよ。今は活字印刷ないんでしょ。

江口　ありますよ。高級な文字本とか、名刺とかに使う人がいます。活字を拾う人もほとんどいないので、活版印刷は高い。

斎藤　ほとんど文芸書だけです。

堤　毎日新聞はパンチャーがいて、鋳植機（ちゅうしょくき＝活字を鋳造すると同時に、原稿通りに並べる機械）に通すと、活字になって、ガチャカコンガチャコンと出てくる。神奈川新聞はそれ以前で、まったく、手拾いだったから。

西川　手で拾った活字を箱の中に入れてね。

江口　私は初校で大幅に書き直したら、植字工の人が、怒って、「組み直すのがどんなに大変か。自分でやってみろ」と言われましたよ。実際やらされたけど、とてもできない。それ以来、私の原稿は直しが少なくなった。会社に入っても、この経験は役に立ちましたね。

堤　15字ずつ、拾ってきて、小組といって箱に並べ、それをブランケット版の大組にする。最初は何も分からないから、紙に1字1字書いて、字数の計算をして、

ここにこういう風に、入れるというバカなことやってたんだよ。そんなことで徹夜していた。

江口　早稲田スポーツの原稿用紙ってありましたか。

西川　ないよ。藤井忠彦（教育・宇部高、競走部駅伝主将）さんが、どさっと差し入れてくれたことだけは覚えている。あとは、個人が適当に買ってたんだね。

堤　1行15字で書いていたことは間違いない。

西川　４００字詰めの原稿用紙に15字のところで線を引いて書いてた。

堤　新聞社に入ったら、ザラ紙だからね。1枚に1行とか。私が入ったときは2行か、5字3行。事件が起きたとき、何人かで拾わせればものすごく速いということ。ザラ紙で、マス目の原稿用紙に書くなんて偉くならないとやらせてくれない。編集委員とか、コラム書く人とか。

一難去ってまた一難、「こんな新聞は早稲田の恥だ！」

中津海　新聞作りを何も知らないから、安井俊雄先生に呼び出されて、教わったとか。

西川　学部に新聞学の教授がいることは薄々知っていたけど、創刊前に挨拶に行くなんて、全く頭になかったんだよ。

《創刊号を出してホッとする間もなく、突然、教育学部事務所前の掲示板に、「早稲田スポーツ」の責任者は安井俊雄教授の研究室へ来るようにという貼り紙が出された。松井も自分も当時、安井教授の授業を取っていなかったし、名前すら知らなかった。いったい何事かと、不安にもなったが、とにかく松井と二人で指定の日時に学部の事務所に出向くことにした。事前に安井教授の専門を調べると、新聞学。教育学部で新聞学の授業を持っていた。さらに、大学に来る前は朝日新聞で、かなり上にいた人だということも知った。

学部の事務員に、安井教授からの呼び出しの件で来たことを伝えると、「教授がお部屋で待っています」と言う。わざわざ私たちを部屋で待っているとは、ただならぬ雰囲気を感じた。教授の部屋に行くと、案外小さな部屋で、安井教授は奥の窓際に机を置いて座っていた。丸顔でやや小太りの人だった。私たちが「早稲田スポーツ新聞です」と名乗ると、笑顔も見せずに、ジロリと私たちを見た。

「君たちの新聞を見たが、全くなっとらん」と、機嫌の悪そうな口調だった。「あんなものを出されては困る。あれでは早稲田の恥だ。少しは新聞の勉強したまえ」と、声を少し荒げ、いくらか説教じみていた。自分たちは新聞創刊の経緯や新聞について持論を述べて、安井教授に反論したつもりだったが、全く聞く耳持たずの雰囲気だった。逆に、安井節を延々と一時間ばかり聞くことになった。いやはや、新聞を作る前に、新聞学の教授のところに一度くらい顔を出してお伺いを立てればよかったな、という気持ちだった。

自説を延々と話すうち、安井教授の言葉はなぜか柔らかくなってきた。それで、「どうもこの先生は私たちを呼びつけながら熱心に自説を説いているのだ」ということがわかった。

そのうち、「どうだ、今度、家に来ないか。徹底的に新聞とは何かを教えてやる」と言い出した。これには二人とも呆気に取られるやらびっくりするやら、とにかく意外だった。足元の大学内に新聞学の大家がいて、しかも直々に教えてくれるというのだ。創刊前に「明大スポーツ」の鈴木宏編集長に頼んで「新聞作成」のレクチャーを受けたのだが、新聞編集の専門家から見たら、全くなっていない新聞だったのだ。教授は、見るに見かねて、家で教えてやると、家庭教師を買って出てくれたのだ。

「明日から一週間ほどやろう。しかし、君たちの都合もあるだろうから、後で日程を連絡してくれ、最低でも一週間、あるいは十日は必要だ」と言った。

二人は素直に「よろしくお願いします」と頭を下げて、教授の部屋を出た。》

西川　それから松井と二人で、1週間くらい毎晩、大学から吉祥寺の安井家に通いましたよ。安井さんの話は堅い話ではなく、新聞の話と世間の話をミックスして、わかりやすかった。しかも、酒と食事つきだから、これほど贅沢な講義はな

いよね。講義は、ほぼ1時間しかもたない。で、「おーい」と奥さんに声をかけると、夕食になるわけ、必ず酒がついてくる。私と松井は飲めないんだよ。「酒はどうした」、「飲めません」、「酒ぐらい飲めないと、社会人になって困るよ。世の中は酒ばかりだぞ」って（笑）。

中津海　代わりに行ってあげたかった（笑）。

堤　安井さんは、朝日の整理部の記者だったよね。

齋藤　整理部やらないと、偉くなれない。

堤　整理部って偉いんだよ。各部から出された原稿をどう扱うか判断する。これを1面トップで扱うとか。大事件が起きたら号外出すとか。新聞社の頭脳ですよ。毎日では「内務官僚」と言われてた。

斎藤　確かに、毎日でアルバイトやってるとき、整理をやれば、偉くなるよって言われた。

堤　整理部の人がまず、偉くなる。安井さんもデスクをやってたはず。号外も出

したと言ってましたよ。早稲田から新聞学の講座をやってくれと依頼されるくらいの人だから。

中津海　安井さんは、政経でもゼミと講座を持っていた。何を習ったか覚えてない。ほとんど行ってないから（笑）。

大胆にも、体育実技の先生に2万円の借金を申し入れる

中津海　ところで、松井さんは、学生時代、スポーツをやってたんですか。

堤　高校では軟式庭球をやってて、関東大会とか、そこそこ実力はあったんでしょ。早稲田に入って軟式庭球部に行ったけど、レベルが違うんで入らなかったと思うよ。

江口　松井さんは、体育の授業で、板野寿夫さんの軟式庭球をとった。そこで板野さんを知って、創刊資金の一部を出してもらうんですね。大胆というか、厚かましいというか。

西川　松井は新聞を出したいという話を板野さんにしていて、お金の相談もしたと思う。

板野さんは神保町の表通りにあったウララネオンという会社の社長でもあった。よく行って、ご馳走になったね。もちろん広告も出してくれたし、広告を出してくれそうな会社をいろいろ紹介してくれましたよ。大恩人です。

堤　借りたのは、2万円だったの？

江口　50周年で取材したときは神奈川新聞から、３０００部で5万円だと言われたと。まあ、広告と販売で1万円はいけるだろう。残りの4万円を集めなきゃいけない。まずアルバイトして、2万円を稼ぐわけですよ。あと2万が必要だ。2万円を板野さんのところに借りに行くという話でした。

西川　目黒区の緑が丘にあった自宅を訪ねて事情を話すと、よく聞いてくれた人だったね。「2万をただ貸すんじゃないよ。お前たちの情熱を担保にするからね」と言って、お金を出してくれた。もちろん借用書は書いたよ。

堀　「情熱を担保に」って、いい言葉だね。

堤　その熱意で大浜信泉総長も動いたし、大西鐵之祐さんも動いたし、みんな早稲田の人はあったかいというか、気持ちが通じれば、積極的に援助してくれる。

西川　大西さんが秘書課長にいたから、新聞を出す前に、総長にもインタビューできたんだよ。早稲田大学新聞はそう簡単に会えなかったって、のちに友人になる松井の高校の先輩、サントリーの小玉武さんが言ってたよ。

斎藤　いまは作家ですね。安保が終わって、早稲田も騒動が落ち着いて、大学もスポーツ新聞を作ろうと思っていたんじゃないですか。

西川　そこまで、総長の発言では伺えなかったね。空手部長だったから、新聞創刊のメッセージをもらいに行ったのに、空手の話が延々、続いた。まだ、安保は終わっていないよ。学内は立て看板だらけ、大学構内をデモする学生はいっぱいいましたよ。

堤　セクトの話で言うと、大学新聞は戦後、商学部の名物教授、中島正信（１９

早稲田スポーツ

春秋慶応を連破！ 早慶戦

惜しくも二連覇逸す 学園ナインの健闘空し

秋の六大学野球

発刊によせて 大浜信泉

私学とスポーツ

創刊号には、大浜信泉総長へのインタビューをまとめた「私学とスポーツ」を掲載。「早稲田大学新聞」から抗議された（昭和34年11月17日号）

早稲田スポーツ

気力で獲得20回目の賜杯

東上初六連戦の末慶大を破る

快腕、安藤49イニング完投

特筆さる充実したチーム・ワーク

球史に残る大激戦

学生の心をつかめ

創刊一周年によせる

創刊1周年記念号は、奇しくも6連戦の結果報告特集となった。ここにも大浜総長はコメントを寄せてくれた（昭和35年11月22日号）

73年没、71歳）が復刊して、題字は「早大新聞」。間もなくかつての「早稲田大学新聞」に題字が戻るのだが、復刊初代会長の中島教授は、当初大学当局が復刊を計画していたのを「御用新聞反対」を訴え、戦時中の「大政翼賛」でない民主的な運営を目指した。結果的にそれが裏目に出て、セクトに乗っ取られたんだよ。大学当局の復刊計画に反対したことを悔やんでいた。そういう意味では、学生が自発的にスポーツ新聞を出そうと言ってきたのだから、総長サイドはできるだけ協力しようとなったと思う。

西川　大学新聞は権威、権力を持っていたから、強気だったね。「俺たちに黙って、総長に会いに行くとはけしからん」というようなことを言われたよ。

中津海　部室、建物があった。

堤　大学から借りてるんじゃない。新聞会のものだからね。

斎藤　あの頃、新聞は4つあった。「ワセダ・ガーディアン」、「早稲田大学新聞」、そして「早稲田スポーツ」が出て、さらに、「早稲田キャンパス」が創刊された。

キャンパスが政治的には温厚だったけど。

江口　今は全部ない。そういう意味じゃ、早稲田スポーツの継続力はすごいよね。

斎藤　今、大学が出してる、「早稲田ウィークリー」に比べても大変なもんですよ。しかも、大学の援助なしに自力でやってきた。

堤　サークル活動費でいくらか、もらってるだろうけど、それ以外は援助金をもらってない。

斎藤　学内の公認団体だから、いくらかもらわないといけない。

堤　学生会館に行って、２０００円だか、もらってきた。

江口　私のとき1万円だったから、もう少しもらってたと思います。

西川　最初は夢みたいな話で、「絶対にうまくいかないよ」って、みんなから言われていた。学生の会として認められるのも難しいと思ったね。それがここまで続いてきた。

斎藤　先日、スポーツミュージアムに行ったら、年表に「早稲田スポーツ創刊」

と書いてあって、仰天したし、うれしかったですね。

授業料で印刷代を立て替え。やがて「倒産」の危機に

西川　創刊したものの、いつまで続くかわからない状況で、あるときは、宇野が授業料を出して、印刷代を払っていた。実家に督促状がきて、親がびっくりしたと、何かに書いてたね。早慶6連戦（後述）で、大儲けするまでは、火の車だった。

堤　英ちゃん（堤と同期の山崎英夫）も、同じことを経験してるよ。やっぱり親に督促状が行って、何やってんだと。

中津海　堤さんたちまでは大変だったと思うけど、4代目になると、地盤ができていて、普通に流れていたと思いますね。

堀　次男坊、三男坊のような、のんびりした雰囲気が出てたよ。でも、財政危機はあったんじゃないの。

江口　ありましたよ、不況になって。

堀　心配になったよ。江口の頃、畳むんじゃないのかって。

江口　新聞発行はある程度、軌道に乗っていたし、普通にやっていれば、新聞は出るだろうと思っていた。ところが、日本の経済に陰りが出てきて、これまで広告を出してくれた広告主が、出してくれなくなって、ひずみが一気に出た。その上、集金が滞っていたから、お金がなくて、印刷代が払えなかった。それで、1月号の原稿を持って行ったところ、受け取ってくれないの。払うまで受け取らないと言われて、原稿を持って帰った。

西川　神奈川新聞の戸塚さんが言ったの？

江口　そう、それで、先輩たちを呼び出したじゃないですか。大隈講堂の前で事情を説明しましたよ。愚かなことに、社会人だから、簡単にお金を出してくれると思っていた。考えてみたら、入社1、2年目で、お金なんか、持ってるわけがない。

中津海　江口が3年のとき？

堀　私は記憶あるよ。

堤　私は長野支局で、東京にいないから。

江口　西川さんもいましたよ。こっちは遠回しに金出せって言ってるのに、聞いてない（笑）。「頑張るしかないな」って。

堀　こっちは金を出す気がないから、これで終わりか（笑）。いよいよ、潰れるかって。

西川　松井のお袋にこの話が行っちゃった。彼女は神奈川新聞で仕事をしていて、トップと付き合いもあった。たぶん、心配してたと思うね。

堀　どうやって立ち上がったの。

江口　姉貴にボーナス出たから、11万を一時的に貸してくれって、貯金も下ろしたはず。姉貴が早稲田スポーツに入るきっかけをつくり、私が新聞に入れ込んじゃったので、申しわけないと思ってるわけですよ（笑）。会社に入って

ボーナス2回で返しました。

堀　在学中は返せなかったわけだ。

江口　当り前じゃないですか（笑）。

中津海　私は金のことはノータッチだったけど、奥本は苦労していたと思うよ。

江口　中津海さんのときは、オリンピック前で、景気もそこそこ良く、ある程度はうまくいってたと思います。

堀　奥本のときは、まだ大丈夫だったんじゃないかな。

西川　あの頃は外からでも気になったな。

江口　実は、次年度の業務だった山本によると、4月号を出すときに、現金がほとんどなくて、3年生全員に声をかけて、2万円ずつ拠出させ、15万近く集めたそうです。それで、1月号の印刷代を払ったと。

斎藤　それでわかった。誰にも言ってませんでしたが、私は3年のとき、大隈奨学金をもらってたんです。それを出した覚えがありますよ。返済義務のない奨学

金でしたから、先輩たちのように親や姉には迷惑をかけてない（笑）。

江口　しっかりしている宮坂のことだから、1月号の印刷代を払ってないはずはないと思ってたが、広告の未集金が10万以上あったので、それを集金して払いなさいというつもりだったんでしょう。山本は、ちょっとずつ、それを集めていって、拠出金をちょっとずつ返していったと。最終的に1万円足りなくて、私の会社に借りに来た。彼は、律義にも初任給で返してくれたんですよ。

中津海　山本もいいところがあるんだね。そんな事情は全く知らなかったよ。あらためて、おわび申し上げないといかんな（笑）。「早慶戦の夕べ」で稼いだんじゃないの？

江口　それも失敗で、「早慶の夕べ」の当日、大雨が降って、当日払いの人がキャンセル、払い戻してくれという人もいて。

中津海　私のときは儲かったよ。大隈講堂に、伊東ゆかり、園まり、中尾ミエを呼んで、挨拶したのを覚えてるよ（笑）。

江口　私のとき、その「おこぼれ」を少しもらったと思います。

西川　イベントといえば、私のときは、織田幹雄さんやオリンピックのメダリストが来て、講演してくれた。講演料など要求されなかったと思うよ。

江口　我々のときは、早稲田祭で「東京オリンピック展」をやって、盛況でした。

斎藤　東京オリンピックの金メダルを、よく貸してくれたと思う。学生が、喜んで首に掛けて写真を撮ってましたよ。もちろん、「早スポ」部員もね。持って行かれたら、完全にアウトだった。

江口　それだけじゃない。織田幹雄さんがアムステルダム五輪で獲った日本初の金メダル、ベルリン大会の、教科書にも載った西田修平・大江季雄の「友情のメダル」も展示しましたよ。学生の一サークルによく貸してくれたものだと、今でも信じられない。ただ、東京五輪の金メダルは、帯の部分が手あかで汚れ、返却にいった畑中は、こっぴどく叱られた。

堤　我々が2年生のときの早稲田祭では、早慶6連戦の記録フィルムを上映した

1964年の早稲田祭に参加し、「東京オリンピック展」を開く。金メダルをかけて、満面笑みの中津海光夫(左)と宮田博子。会場には、東京オリンピックの金メダルのほか、歴史的な二つのメダルを展示。アムステルダム五輪で、織田幹雄が獲得した日本初の金メダル(上)、西田修平と大江季雄がベルリン大会の棒高跳で、同記録の2・3位。銀・銅のメダルをそれぞれ二つに割り、つなぎ合わせてメダルを分け合った。これは「友情のメダル」と称され、教科書にも載った。

早稲田スポーツ

新春によせて

部員の奮気を望む

スポーツは人間形成の基礎

常に誇りを

選手の自覚

見習え！

輝ける勝利の年

KY商店

第39代学生横綱・新保茂の新年号を飾るにふさわしい雲竜型
(昭和37年1月20日号)

早稲田スポーツ

1月号

ホップ・ステップ・ジャンプ

主張

KY商店

東京五輪前年の新年号では、三段跳の下哲(教育・近大附属高)を出場確実と紹介したが、その後、スランプに陥り、出場できなかった(昭和38年1月25日号)。下の16m16は今も早稲田記録(自己最高は16m36)。

よ。早稲田が得点を入れる場面では、ウォーって歓声があがってね。すごい人気だった。

野球部のＯＢ会、稲門倶楽部が２０１０年10月に「早慶６連戦50周年記念」の集まりを神宮球場の近くで開いた。石井連蔵監督、徳武定之キャプテン、野村徹捕手、金沢宏投手、所正美外野手、末次義久遊撃手、当時１年生だった私と同期のキャプテン村上唯三郎らが思い出を語ったが、そのときも、６連戦の記録フィルムが上映された。

稲門倶楽部で野球史を研究していたのは、本村政治（石井連蔵の１年下、１９６２年入部）で、彼がＤＶＤにして持っていので、この会のあと、それを分けてもらった。

同期の「早龍会」の集まりで流したことがあるが、勝つとわかっているから、気分がいいんだな、けっこう人気だったよ。

堀　当時、会計的にどのくらいの規模だったのかな。

江口　我々のときの数字があるんですよ。39年春の早慶戦特集号で広告収入が15万７２００円。販売収入が５万４８８０円。ほぼ、５５００部売れたということですね。今、そんなに売れないでしょ。印刷代が16万６９５０円。発行部数は８０００部。やっぱり早慶戦の儲けが主だった。春は優勝がかかっていたけど、秋は優勝に絡んでないので、３１００部しか刷ってない。

斎藤　現在でいうと、「今年の春の早慶戦特集号は４０００部刷って、２８００部売れた」と、小松純也編集長がＯＢ総会で話しています。

最高部数論争勃発！　10万部？　1万部？

堀　１９６０（昭和35）年の早慶６連戦が史上最高の部数だと思うんですよ。

西川　毎日、神奈川新聞に増刷分を取りに行ったもんだよ。10万部はいったと思う。

江口　そこで疑問が出てくるんですが、西川さんは50周年のとき、６万部くらい

だと話しています。当時、業務をやっていた山崎英夫さんが、そんなに部数はいってない。だったら、もっと金があったはずだと。

西川　でも、金はあったよ。金城庵を貸し切って、打ち上げをしたし、東山温泉の合宿費用も取らなかった。

堤　英ちゃんに、誰か増刷分を取りに行ったかって聞いたら、取りに行ってないと言ってましたが。

西川　取りに行ったよ。

堀　私も取りに行った記憶がない。

中津海　葬儀屋に次の日に使う分を置いていたわけ。

西川　信濃町駅前の帝都典礼に、新聞を置いてくれないかと、頼みに行ったら、案外あっさり「いいですよ」って。

堤　英ちゃんに確認したら、増刷はしてないって。

西川　いや、増刷してるよ。

江口　これまでの「公式」部数は2万部ということになってますが、2万部でも、神奈川新聞から持ってくるのは、相当大変だと思います。誰も記憶にない？

堀　少なくとも、当初は売れるという予測をしてないよ。だから、2万部を刷るはずがない。6連戦になるとは思ってないからね。

西川　6万人入って、超満員。

堀　6連戦のときは、新聞を売らなきゃいけないし、試合も気になるし。行列している所で売っていても落ち着かない。早めにスタンドに行って、6連戦は全部、見ましたね。

西川　あれにすぎるゲームはないね。

堀　新聞会にとっても起死回生なこと。財政的にも潤った。

西川　板野さんに借金を返せたのが良かったよ。肩の荷が下りたというか。

江口　単純に計算すると、6万部売れたら10円硬貨で6000個。それをどこに置いたのか、誰も記憶にないのが、不思議（笑）。

堤　帝都典礼から持っていって、どこに店を出したかも記憶がない。

西川　責任者は山崎茂だった。麻雀に狂う前（笑）。

堤　結論として1万部だな。

斎藤　一つの結束っていくつですか。

堤　５００。

江口　通常号は、３０００部だから6個。3人で2個ずつ担いできた。平常号は4ページだけど、早慶戦特集号は増ページだから、1万部となると、かなりの人数が必要でしょう。それを何回かに分けて運んだんじゃないですか。

西川　1、2万部ということは絶対にない。松井が生きているときに、二人で、「あのときは何万刷ったかな」という話題になってね、そのとき、「試合後、毎日あわただしく増刷分を取りにいったので、正確な部数はわからないけど、最低6万部、あるいは10万部くらい刷ったかもしれない」という話をしたのを、はっきり覚えているよ。取りに行ったのを誰も覚えていないのは、単に行ってな

いからだと思うね。少なくとも、私と松井は取りに行ってるんだから。

堀　往復の交通費とか、取材費とか、バカにならない額で、バイトで稼ぐしかなかった。

結局、部数論争は物別れに終わった。ここから得られた教訓は、記憶というものが、いかにあいまいか、ということだろう。

小見出しでは、史上最高部数ということになっているが、早稲田大学創立100周年（1982年）の優勝がかかった早慶戦特集号は2万部刷ったが、かなり余った（織田健途編集長）という話があり、とりあえず、早慶6連戦のときの早慶戦特集号は「史上最高販売部数」といういうことにしておきたい。

早慶戦特集号を出す、出さないで決闘？

部数論争はさておき、早慶戦特集号の発行についても、信じられない！　論争

があったのだ。論争の原因は、「早稲田スポーツ」創刊の「趣旨」にあったというので、ここに、創刊のとき、部員全員で確認し合った3つの「約束事」（趣旨）を書き出してみよう。

❶野球など、人気のスポーツに偏らず、すべての運動部の記録を公平に扱う。
❷ヒーロー主義に陥らず、努力している多くの選手たちの姿を紹介する。
❸スポーツの教育的側面、学業と運動との両立の問題などは積極的に取り上げる。

この3点を前提にして、西川の文章を読めば、内容を理解できるはずだ。

《早慶戦特集号を巡って、自分と松井は大衝突することになった。一年生の終わり頃か、あるいは二年生になったばかりの頃だったか、定例の会議を喫茶店で行った。この日は「早稲田スポーツ」の編集方針を確認するのがメインテーマだった。議論が沸騰したのは野球のことで

あった。松井は創刊当初から、早稲田の体育局に所属する各運動部の記事を公平に載せるべきだと考えていた。当然、私たち全員も松井の考えに賛同して、新聞作りに参加したのだ。

しかし、年が明けた頃から、新聞が売れなければ「早稲田スポーツ」の存立基盤がなくなるのは目に見えてきた。学生が好む記事をより多く載せないと売れない、そのためにはどうすればよいかが自分の中では、大問題だった。平等に記事を載せるというのではなく、当然のことであるが新聞全体にメリハリをつけるべきだという考えである。

具体的には学生が好む野球の記事を多くして学生の関心を引き付けることが大事だと思っていた。早慶戦ともなれば、5万人を超える大観衆が神宮球場に押しかけていたのだから、「早稲田スポーツ」拡販のカギがそこにあると感じてならなかった。

そして、創刊号の準備に忙しかった頃、秋の早慶戦があり、「早稲田大学新聞」が作る中途半端な早慶戦特集号が次から次へと売れてゆく姿を目の当たりにしてもいた。この様子に野球の記事が持つ強力な力を見る思いだった。

そこで、「早慶戦特集号」を出そうよ、と提案してみた。松井は、案の定、強硬に反対して

きた。さらに、自分の担当している部の記事に重点を置くという考えが気に入らないと言う。松井の「各部平等に扱う」という創刊以来の精神は十分に承知していていたが、「早稲田スポーツ」が創刊以来持つ販売面での苦戦はどうにもならず、このままでは板野寿夫さんの借金も返せないという不安のほうが先に立った。もともと、二人の野球に対する考えが両極端であることは百も承知で議論をしていたから、初めから話はかみ合わない。これまでも、二人の意見が合わないことはあったが、右か左かを決めるときにはほとんど、松井の意見に従ってきていた。しかし、今回は一歩も譲れないと思っていた。自分が明確に松井に反対意見を言ったのは、早慶戦特集号問題が最初だった。

二人の議論は堂々巡りを繰り返し、ラチがあかなかった。山崎茂が、「腕ずく」で決着したらどうだと、言い出した。喫茶店の中で激論を戦わすのはまずいと思ったのかもしれない。山崎は続けて「甘泉園に行こう」と言う。松井も自分も後には引けなくなっていたので、この言葉に誘われるように外へ出て、甘泉園まで歩いた。二人は甘泉園の広場のような場所を見つけて、山崎が言うままに、何回も、相撲のようなレスリングのような格好で力を競い、決着をつ

けようとしていた。何とも笑い話のような出来事だった。やがて、二人とも疲れが出て、「このへんでやめよう」となった。決着のつかなかった「腕ずく」だったが、これで「早慶戦特集号」を出すという決着となったことは疑いのない事実だ。

「出すと決まったからには全力を挙げよう」と、松井もさっぱりしたもので、部員全員の前で特集号発行の宣言をした。幼稚な「甘泉園の決着」によって、「早慶戦特集号」が誕生し、半世紀以上にわたって、それが脈々と引き継がれていることは、自分にとって、実に喜ばしいことだと、後輩たちの努力に感謝している。》

堤　早慶戦特集号を出すか出さないかで、論争していたのは、「商売」を忘れていたからだよ。その点、慶応は偉いんだ。戦後すぐに、三田新聞が「三田スポーツ」という早慶戦特集号を三田新聞の別刷りで出したんだから。必ず売れて、お金になるとわかってた。ところが、「早稲田スポーツ」は、早慶戦前に出すどころじゃなかったって言う。後から検証すると、結果報道すれば、紙面が埋まると

いう単純な理由で、早慶戦後に創刊して、ビジネスチャンスをみすみす逃している。商売のわかってる人たちでやったら、秋の早慶戦号を創刊にしようと、考えたはずだ。

堀　松井さんが各部平等主義だった。野球だけに傾斜するのはポリシーに反すると、いつも西川さんとやり合ってた。

西川　すいぶん、言い合ってたよね。

堀　ああ、やってる、やってるって、我々は傍で見てただけ。早慶戦特集号も西川さんが熱弁を振るっているのに、松井さんは「聞く耳持たず」という雰囲気だった。そして、大反発してる。

西川　「なんで野球だけ取り上げるんだ」と言ってね。お金がなくて困ってるのに。

堀　我々は、上層部二人が対立してて、どっちに加担していいのか、どういう態度を取るべきか迷ってましたよ。（笑）。

斎藤　大学新聞も早慶戦で儲けてたんでしょ。

堤　慶應義塾新聞は週刊誌スタイルの早慶戦号を出していて、40円だった。

中津海　私のときは、早慶戦特集号を出すのは当たり前のようになってたから、今のような話は、信じられないよ。

堀　6連戦で、財政的に立ち直ったから、体育局からも完全に認知された。

堤　さっきの部数の話に戻ると、春の早慶戦特集号で、ある程度潤って、よし、秋は1万部でいこうって、なったんだと思うよ。そのあと、増刷したかという問題だね。

西川　本当は、私が編集長なんだから、「野球を無視するのは、おかしいよ」と、自分が決断すべきだったんだろうけど、お互い、意地の張り合いになっちゃった。本格的な取っ組み合いにはならなかったけど、松井もわかった、1回やってみようと、折れてくれた。これが、「甘泉園の決着」と言われた。まあ、幼いけんかだったね。

中津海　4代目になると、けんかは見たことないな。私も野球とボクシング以外

昭和35年11月12日、今なお語りつがれる早慶６連戦は、早稲田20回目の優勝という結果で、長いドラマの幕を閉じた。49イニング完投の安藤元博投手を胴上げ（写真上）と徳武定之主将と応援部・友田力主将が歓喜の握手。

に興味がなく、野球はとにかく全試合行ったと思う。

西川　松井に言わせると、それじゃダメなんだよ。

中津海　2年のとき、早慶戦特集号で、慶応の担当になって、選手の話を聞き、写真を撮って来いと言われ、日吉の合宿所に行った。私は写真を撮れないから、友人に頼んで、写真を撮ってもらったことがあったね。当時の合宿所はなくなって、今の立派なグラウンドと合宿所を大成建設（注・中津海が就職した会社）で造った、格安で（笑）。野球は4年の春に、入学以来、初めて優勝した。

堤　我々が卒業してすぐに、石井連蔵監督が辞めさせられ、石井藤吉郎さんが監督になって、三原啓治がキャプテン。それで、いきなり優勝だもん。そんなことが起こりうるのかなと思った。

斎藤　あのときは、石井監督の指導法を巡って、相当議論しましたね。

江口　禎さんをはじめ、1年生は全員が監督交代すべき派だったよね。野球は楽しいものだと思って、早スポに入ってきたのに、暗いんだよ、野球が。3年の高

橋さんは強硬な監督擁護派だったけど、私は強硬に交代説をぶった。編集長の中津海さんは困っちゃって、野球担当の江口に任せると。それで、「野球部は立ち直れるか」という特集で、素直な学生の気持ちを記事にした。

中津海　私のときは、神宮球場がプロ野球と併用されるというので、とんでもないと思い、「学生野球はピンチに立っている」という特集を組んで、燃えながら書いた覚えがあるね。そもそも神宮球場は大学野球に支えられて生き永らえてきたんだから。明大野球部の島岡吉郎監督でさえ、「命と引き換えても、神宮を守る」と言ってたよ。

西川　連蔵さんの練習については、私のときから、やりすぎだという批判は出ていたけど、6連戦の実績があるから、なかなか言い出す人がいなかったんだろうね。

堤　私も野球部を批判したことがありますね。いくら厳しい練習やったって、結果が出ないんだもん。何か間違っていると思うのが当然ですよ。「史上3度目の

早稲田スポーツ

月刊 第34号

御食事はこんぺき

主張

常に自主性をもて

三選手に晴れの小野賞

梅本 松本 益田

しめやかに慰霊祭

春の戦力を探る

優勝へ意気さかん

ボクシング 強敵は中大と立大

日、中、

全盛期だったボクシングは、しばしばトップ記事となった
（昭和38年4月25日号）

早稲田スポーツ

月刊 第36号

鈴木運動具店

主張

学生野球はピンチに立っている

〈神宮球場問題をつく〉

設立趣旨はどこへ

プロの攻勢にタジタジ

運営方法に問題点が

一方的な規約の改正が発端

加藤

はす

神宮球場にプロ野球が進出するというので、大反対の論陣を張る
（昭和38年6月20日号）

五位　問題点はどこに」という記事にまとめた。

江口　堤さんは辛辣なんだよ。「入学試験がきびしくなったという声も聞かれるが、それは言い逃れである」、「型にはめこむ早稲田式バッティングが悪い」、「4年生を使わない石井監督の起用法が悪い」って、怖いもの知らず。

斎藤　今は批評的な記事がほとんど見当たりませんが、かつての「早稲田スポーツ」には、ある種のジャーナリスティックな視点がありましたよね。

江口　ジャーナリズムとは何か、とまでは考えていなかったけど、学生的な本能として、アマチュアリズムを守ろうという意識はあったと思う。

斎藤　中津海さんの記事も「アマの殿堂を守れ」という訴えでした。

　私も昭和40年に「二年目の体育学専修」という記事をほぼ1面使って書きました。今のスポーツ科学部、人間科学部の源流ともいうべき「教育学部教育学科体育学専修」の実態を追って、志は認めるけれど、あまりに研究室などの施設が貧困ではないかと指摘しましたね。

中津海　私は、神宮球場がプロに開放されるというのは、歴史的に見て、おかしいじゃないかという観点から、書いたはずだよ。

光っていた伊藤さんの写真。カメラはいつも質屋にあった

堤　ここで、写真の話をすると、4年生で入ってきた伊藤昌俊（61年教育卒・浪商高）さんの貢献は大きかったと思うよ。彼が写真部からきてくれなかったら、早慶戦の1面の写真なんか撮れなかったでしょ。当時のまともな写真はすべて伊藤さんが撮ってる。伊藤さんは下宿の押し入れに黒い幕を張って、暗室を作り、現像までしていた。夏は真っ裸でやっていたとか。

西川　そもそも写真なんて新聞社から借りればいいという発想だったからね。あくまで、記事中心という考えだったから。現に早慶戦のトップ写真をスポニチのカメラマンに撮ってもらったくらいだよ。

中津海　我々のときも、早慶戦のトップ写真を写真部の今井隆一さんに頼んだこ

伊藤昌俊が撮った早慶戦特集号のトップ写真（昭和35年6月1日号）。この特集号が「早稲田スポーツ」を救うきっかけになったのだ。

今井隆一さんに依頼して撮った早慶戦特集号のトップ写真
（昭和38年6月1日号）

とがある。やっぱりでき上がりが違うんだな。今井さんは、カメラマンとして、主婦と生活社に入った。

斎藤　高橋さん、江口さん、益子と、代々写真主任は、眼の悪い人ばっかりだったから、ピンボケ写真が多かった（笑）。益子が撮った早慶戦の1面写真はかなりボケていて、後々まで、ずいぶん気にしてたみたいだけど。

江口　特に夕方の神宮球場や室内はよく見えないんだよ。ピンよりカン（笑）。

西川　部にカメラは、なかったはずだよ。宇野が持っていたアサヒペンタックスをみんなが使ってたのかな。

斎藤　でも、いつも質屋だった。

堤　英ちゃんが、質草になっているミノルタカメラを受け出すため、初めて質屋に行ったと言ってた。経済の仕組みがわかって、非常に勉強になったと（笑）。伊藤さんのカメラはニコン6Lという高いやつ。

西川　山崎が麻雀の負けを払うため、勝手に質屋に入れちゃうんだ。私も質屋に

いきましたよ。

斎藤　私の頃もまだ、その伝統（笑）は続いていて、「すずや質店」にカメラを持って行くと、何も聞かずに「はいっ」って、お金を出してくれるんですよ。いくらだったか忘れちゃったけど、学生に優しかったですね。

江口　新聞には、質屋の「すずや」と「タカノ」の広告が並んで載ってた。宇野さんは、カメラを使い回されていて、自分のカメラではない状態になっていたので、２００ミリの望遠レンズをつけて部に置いていったそうです。そのペンタックスとミノルタユニマットというカメラがあったけど、ミノルタは今でいうコンパクトカメラだから、せいぜい顔写真を撮るのが、精一杯。

斎藤　益子なんか、そのコンパクトカメラを持って品川スケートセンターに行き、フィギュアスケートの福原美和（文・森村学園）を撮っていたんだから、無知なのか、天才なのか（笑）。

中津海　そんな状態で、よくやってたんだね。そういえば、高橋もピンボケが多

かった。今はカメラも良くなってるから、押せば撮れるんじゃないの。

江口　今はすごいですよ。多くの部員が一眼レフのカメラを持っていて、部には何十万もする望遠レンズが数本あるとか。写真の質も我々のときとは、全く比べ物にならない。

「スポーツ年鑑」発行を提案し、全部員に反対されたが

今は、競技スポーツセンターで発行されている「早稲田大学スポーツ年鑑」は元来、早稲田スポーツが独自に編集、発行していたものだ。

年鑑は、新聞に比べ、はるかに広告依存度が高く、部員は寝食を忘れるほどではないが、それに近い勢いで、広告取りに東奔西走していた。

《「明大スポーツ」にヒントを得てスタートした「早稲田スポーツ」だったが、実は次の一手のヒントも明治大学にあった。明治大学体育会が発行する「明治大学体育会誌」という年鑑が

それである。松井の頭の中には「早稲田スポーツ」創刊直後から早稲田の「スポーツ年鑑」発行の意欲が芽生えていたに違いない。

松井の口から最初に「スポーツ年鑑」の発行が言われたのは「早稲田スポーツ」初の夏合宿、軽井沢・信濃追分清原別荘の席であった。夏合宿は１９６０（昭和35）年の夏、「早稲田スポーツ」会長の清原健司教授が持つ軽井沢追分の別荘の一軒家で行われた。清原さんは中軽井沢出身で旧制上田中学から早稲田高等学院に進学し文学部に入った人である。

「早稲田スポーツ」初の夏合宿を軽井沢・信濃追分に決めたのは偶然である。たまたま、私たちは部の団結を強めるために、初の夏合宿をやりたいと清原さんに相談すると、合宿にはすぐに賛成、ついては場所や宿は決めたのかと聞かれたので、全てはこれからと答えた。即座に清原さんから「うちの別荘を使ったらどうか」と提案があった。松井と自分は思わず顔を見合わせ喜んだ。まさに渡りに船であった。

その夏合宿で、松井が突然、「スポーツ年鑑」を出そうと言い出した。部員の誰もが「明大スポーツ」は知っているが「明治大学体育会誌」（年鑑）の存在は知らなかった。正直なとこ

ろ、新聞発行に全精力を使い果し、新しい年鑑を発行する余力はまるでなかった。夏合宿には私たち同期はもちろん、学年で2年上の先輩部員、それに正規に入部してきた1年後輩の諸君も揃って参加していて、総勢は10人以上になった。

合宿の主たる目的は、素人集団でスタートした「早稲田スポーツ」を少しでもまともな新聞らしい新聞に仕上げることにあった。つまり「新聞」を勉強する会であった。新聞に関する様々な研究を各自分担して行い全員の前で報告し、議論をするという方法をとった。この報告自体、やはり素人集団のやること、どこまで実のあるものだったのかは分からなかった。さらに「早稲田スポーツ」をより多くの学生に読んでもらうための拡販問題もテーマにした。それなりに意欲的な議論ができたと思っている。

清原別荘での会議がひと段落したとき、松井が突然発言した。

「我々は念願の新聞を創刊し、苦しいながらも継続できている。次はスポーツ年鑑を出したい。早稲田のスポーツは学生スポーツ界のリーダーである。しかし、残念ながら年間を通した各運動部のまとまった記録が残っていない。もちろん、各部ごとに整理された記録はあると思う

が、大学として一本化した記録がない。そこに、『早稲田スポーツ年鑑』を発行する意義がある。体育局所属運動部のすべての記録を一括して残すことも我々の任務だとも思っている。年に一回の年鑑を発行できるのは我々しかいない。この新しい企画にぜひ賛成してほしい」と熱弁を振るった。

この話を聞いた部員は一瞬、唖然とした。熱意の塊の松井が放った第二弾の強烈な企画であった。誰も松井の提案に否定的だった。第一、新聞と違って、記録集のような出版物は大学自体が行うべきで、何の収入源を持たない「早稲田スポーツ」が行うべきではない、というのが集約された意見であった。

結局、「スポーツ年鑑」発行論議は夏合宿では提案のみに終わったが、妙に頭に残る課題だった。

松井は「早慶六連戦」が終わった１９６０（昭和35）年11月の終わり、編集長を自分に譲ると言いだした。自分としては、一年後輩に優秀な人材が揃ったので、後輩たちが三年になるまで松井が編集長を続けるべきだと思っていたし、日頃も本人に強く言っていた。ところが、突

然、松井は編集長の役を自分に振ってきたのだ。そこには、松井の同期の自分を思いやる心と同時に、周到な計画が潜んでいたようだ。追分の夏合宿以来、「スポーツ年鑑」発行計画が松井の頭に、消えることなく、ますます強い執念となって醸成されていたのだ。

話し合いの結果、突然とも言える形で「早稲田スポーツ」の編集長交代が実行された。松井は、新聞発行活動から身を引いて「スポーツ年鑑」に精力を注ごうと思っていたのだと思う。

翌１９６１（昭和36）年の正月過ぎから、松井は自身の担当部の取材をこなしながら「スポーツ年鑑」の準備に入ったのである。一人で黙々と資料集めをやる姿に、私たちも黙っているわけにはいかず、徐々に部全員での支援体制を考えるようになった。

あるとき、松井が年鑑発行の具体的スケジュールを持ってきた。かなり細かいところまで詰めた計画であった。この計画案の提示を境に「早稲田スポーツ」全体で年鑑発行に臨むことになったのは自然の成り行きであった。改めて、自分は松井と二人でスポーツ年鑑の発行について何回も話し合いを持ち、具体的な計画案を作成した。「スポーツ年鑑」は記録と写真、さらに少々の寄稿文を主体とした。この計画の発案に対してもまず清原健司会長に、次に体育局

長の赤松保羅教授に報告に行った。「早稲田スポーツ」を創刊してまだ間もないのに大丈夫か、という言葉が二人から異口同音に出たのは当然だった。

最大の問題は広告収入にあった。どれくらいの広告収入が見込めるのか、成否は全て、そこにかかっていた。この点は体育局長が確約した先輩が勤める大企業への紹介状が頼りの一つだった。ただ、肝心のＯＢの人たちを私たちは知らない。広告収入が見込める企業一覧の作成から始まって、対象となる運動部ＯＢたちへの電話作戦を始めた。「スポーツ年鑑」発行に向けた最初の活動がこの電話作戦だった。部員全員が手分けして、大企業へ電話をかけまくったのである。新聞創刊のときと違って、すでに「早稲田スポーツ」を発行していたので、新聞の実物を持って、大企業のＯＢたちに説明できたのは大きかった。

そして、体育局からの支援協力を得られた上に、新聞発行という実績を持っていたことも広告を取りに行く部員の自信につながっていたと思う。結果として、これまで「早稲田スポーツ」紙面に登場していない大企業が多く賛同してくれたことが喜びだった。

半年以上の時間をかけて、１９６１（昭和36）年７月「早稲田大学スポーツ年鑑」の第一号、

１９６０年版が完成した。前年の軽井沢・追分夏合宿で松井が言い出してから、ほぼ一年である。「早稲田スポーツ」創刊時に見せた松井の堅固な意思の結晶として、また新しい成果が誕生した瞬間だった。「早稲田スポーツ年鑑」の発行は予想以上に大学当局から評価されたものだった。》

道路の両側をシラミ潰しに。原始的な広告取り作戦

堀　「早稲田大学スポーツ年鑑」はいつまで作ったの？

斎藤　私のときは、お金なくて作ってないです。申しわけありません。

江口　私のあと、禎さんのときに、１年止めて、その後、２年出して終わり。宮坂が年鑑に手をつけ出した１９６５（昭和40）年は、オリンピック後の不況で、たぶん年鑑を出せる状況じゃなかったと思うけど、宮坂が奮闘して、少し黒字になった。禎さんのときは、不況の前に、いじけちゃった。

堀　年鑑には航空会社も広告を出したくれた。大したもんだね。80社ぐらい取っ

たと思う。よく取れたなと思ってさ。一流の企業ばっかりだよ。

江口　広告は宇野さんのときが一番多くて、89社、堀さんのときは86社ですね。その後、76社、71社、63社とだんだん減っていく。

堀　八重洲、丸の内にはよく行ってたよ。あのへんには、かなり詳しくなった。大会社は稲門会がしっかりしていて、そこにお願いに行くと、広告担当部門に、つないでくれた。

堤　総務でしょ。

堀　本当に先輩が頼りになった。でも、自分がサラリーマンになって、早スポが来たら来たで、困るなって（笑）。

中津海　私は広告出しましたよ。

堀　あなたのところはいいよ。

西川　うちも出したよ。

江口　私も宣伝部にお願いして、出してもらった。スポーツ関係の書籍。

中津海　高橋が年鑑だけは頑張ったよ。普段はあまり活動しなかったけど、年鑑責任者になるや、人が変わったように猛然と動き出した。完成したときの抑えきれない喜びを「編集後記」にこう書いているんだよ。

「心魂を傾け本誌作成にあたった。今ここにできあがった本誌を手にする気持ちは、山の頂でほっと一息つく山登りのあの心地である。実に苦しかったが、出来上がったいま、こみ上げてくる喜びは押さえきれぬほどである。とても嬉しい」。

堀　年鑑のときは、確かに頑張っていたね。

堤　東京オリンピック前の景気のいいときで、岩戸景気と言われてた。

堀　いい時期だったね、足を使えば何とかなる。

堤　ほんとに記憶は広告取りばっかりだったね。体育館から毎日電話してた。高島寿郎さんという4年生がいて、広告だけやらせてくれって。マージンを2、3割とったと思うよ。

西川　韮澤元康（政経・室蘭栄高）さんと同学年で、記事に全く興味ない人だっ

た。

堤　江副浩正さん（リクルートの創業者）みたいな人だった。江副さんは東大で、１９５９（昭和34）年に広告代理店業を始めて、「東大新聞」に大企業の求人広告、リクルート広告を入れてるんだよ。こっちも、もっと研究してれば、そういうやり方をやれてたかもしれない（笑）。

西川　こっちは新聞を出すのにヒーヒーだよ。

江口　立花隆は、その江副さんのとこで、バイトしてたと言ってました。今のような大所帯の「早スポ」なら、堤アイデアは生きるかもしれない。

中津海　堤さんは、早慶戦の全記録を本にするんだって？

堤　実際、手をつけてみたら、大変なんだよ。記録が残ってないのもあるし、資料は貸してくれたけど、間違ってるのもある。競技スポーツセンターが正確な記録を持ってない。個人的に協力してもらって、なんとか進めてます。記録は慶応のほうが、しっかりしているよ。

堀　年鑑とかはないの？

堤　年鑑の延長版は作ってるけど、卒業記念の1冊みたいになってる。競技スポーツセンターには２６００人が登録しているようで、３０００部ぐらい刷ってるようだよ。最初は、１９８３（昭和58）年、窪田登さんが局長のときに出した。記録は我々がやった年鑑と一緒で、早稲田スポーツ部員が作ったと書いてある。お金は体育局が出しているけど。記録をきちんと残しておくことは、ほんとに大事だと思ったよ。

中津海　私も、やっぱり広告取りの記憶が一番あるね。入ってすぐ、東京ボウリングセンター（秩父宮ラグビー場と神宮球場の間にあった、日本初の民間ボウリング場）の広告を取ってきたら、先輩にほめられた。それから、広告取りがおもしろくなったね。

江口　それ、ピグマリオン効果だ。ほめて育てる。中津海さんが広告を取りに行くときは「よし、今日は何件取ってくる」と、気合が入ってたけど、私なんか、

オドオドしながら行ってた。

西川　創刊のときは、4人で、二人ずつ早稲田通りの左側と右側に分けて、手当たりしだいに当たったよ。なにしろ、見本紙がないんだから、説明するのに苦労しましたよ。

斎藤　正直言って、思い出というと、広告取りのことしかありませんね。入部早々の頃、藤沢、山本や益子と部室に行くと、3年生の奥本さんが一人陣取っていて、「広告を取ってこい。ついでに、定期購読も」と言ってから、「山本は、神田から早稲田までの通りの右側にある広告を出してくれそうな会社を全部訪ねること。藤沢は同じ通りの左側にある会社。斎藤は、新橋から早稲田までの通り道の左側、益子は右側の会社を一軒一軒訪ねて広告を取ってくること」と、とんでもない〝命令〟を出した。西川さんの話を伺うと、「道路の左右の店を片っ端から当たれ」という松井方式はかなり浸透してたんですね。

江口　そんな厳しいことを言われたのか。私の代は、みんな優しかったから、広

告が取れなかったのは、不況のためだけじゃなかったかもしれないね。宮坂が広告推進のため考えた方法は、今でいう「見える化」、模造紙を張り出して、そこに個人ごとの獲得額を棒グラフにしてた。けっこう気になるもので、最初に張り出されたときは、ブービー。「こりゃ、頑張らなきゃ」と、鼓舞された気がする。

広告取りこそが、部員を精神的にも肉体的にも鍛えてくれたのではないか。「早稲田スポーツ」が浮沈を繰り返しながらも、大学内にしっかりと根を張り、60年もの間、継続して発行できたのも広告取りを地道に続けてきたからだろうと思う。

（斎藤は、奥本に「命令」されたあと、いかに動いたのか。広告取りのリアルを書いてくれた）

見本の「早スポ」最新号を30部ほど小脇に抱え、まず大きな会社なら早稲田出も多かろうと考え、Yゴム会社を訪ねました。当時は、今ほど会社の警備が厳重ではありませんから、会

社の中にやすやすと入れました。まず、1階の受付で、「早稲田出身の社員の方を紹介してください」と頼みました。ふたり並んでいた受付の女性のひとりがにっこり笑って、「ここは営業関係だから、みんな出払っています。2階に行ってみたら」といいます。それではと2階に行くと、ここにも受付があり、「今、部の会議中のようですよ」と軽くあしらわれます。では、3階へと階段を上がって行くと、総務か庶務担当と思しき中年の女性が突如現れ、「ウチは急に訪ねてきても社員を紹介などできません。出て行ってください」と追い払われてしまいました。当然と言えば当然なことですが、あまりにきっぱり断られたので、落ち込みました。

しかし、ここで怯んでは、奥本さんに怒られるとばかり、次にLという英語教材会社を訪ねました。Yゴム会社の経験があるものですから、まず、総務部を訪ねました。ニコニコ顔の社員の方が出てきて、「それなら広告部のA君のところに行きなさい」と言います。

これは脈があると、Aさんを訪ねました。Aさんは30代と見えましたが、「早スポ」の見本紙を差し出し、広告部前の椅子に30分ほど座っていました。すると、Aさんがジロリとこちらを見て、「なんだ、まだいるのか。粘ってもだめだよ」と大声を出し、「だいたい運動をやって

いる連中が英語を勉強するとでも思っているのかい」と侮蔑的なことを言い出しました。自分の思い込みが甘かったかとも思いましたが、あまりの発言に腰が抜けるほど驚きました。社会に出て、英語を勉強する必要がありましたが、人にどんなに薦められようとも、絶対にLの教材は買うことはありませんでした。

つらい体験の後、嬉しいこともありました。Tインキ会社を訪ねた時のことです。ここは、社員の方を紹介してくれました。この先輩は、「嬉しいな、早稲田の後輩が来てくれるなんて。どうしてうちに来てくれたの」と言って、学校のことなどを根掘り葉掘り聞きます。「君は就職をどうするの」「君の周りの人はウチの会社のことどう思っているかな」など質問攻めです。お茶も出してくれました。「いや、飛び込みで御社を訪ねました」などという雰囲気ではとてもありません。広告は予算がないとのことでしたが、この方は、１０００円札を財布から出し、定期購読者になってくれました。今も、Tインキ会社があったあたりを通ると、思わず、この時のありがたさを懐かしんで手を合わせてしまいます。

箱根駅伝もラグビーもマイナースポーツだった

中津海　私は陸上、ラグビー、サッカー興味なし。箱根駅伝は1回も行ったことがない。

江口　箱根駅伝といえば、今でこそ、駅伝、ラグビー、野球が大学三大スポーツだと言われているけど、当時の人気スポーツは野球だけでしょ。

堤　私も箱根は行ったことない。英ちゃんは4年間、全部行ってると思う。彼の話によると、当時は、バスで走り終わった選手を拾い、すぐ、前を走る選手、監督のジープを追いかけたと。１９６２（昭和37）年は、箱根にひどく雪が降り、バスがチェーンを巻いているうちに、選手から置いてきぼりにされたと言ってたね。彼は、春日部高校で、ハンマー投げの選手だった。

江口　「明大スポーツ」と野球の定期戦をやってたでしょ、タチカラ杯。英さんがセンターから、ものすごい返球をしたの。なんだこの肩はと思いましたよ。

堤　応援バスにそんなに乗れなかったと思う。

堀　私も箱根は行ってないな。

斎藤　私は競走部の担当だったけど、行ってないですね。江口さんから話を聞いて、スポーツ新聞も参考にしながら、箱根の記事を書いた覚えがある。

江口　禎さんは、それでうまくまとめるんだよ。でも、自分を恥じていたのか、署名は（低）にしていた（笑）。私は1年のときに、西川さん、松井さん、宇野さん、中野さん、英さんと6人で行って、それ以来、今年まで皆勤。

堤　体育局のバスで？

江口　学生時代はバス、現在は電車。今でも大学のバスは出てますよ。今は規制が厳しく、途中であまり停められないんじゃないかな。

中津海　正月はみんな帰省してたんだろうね。

江口　今は競走部がみんな応援に行くけど、当時は競走部の選手もほとんど行ってない。東京オリンピックで、聖火最終ランナーだった坂井義則君（主将・三次

高）がフジテレビに入ってから、一度飲んだことがあるけど、４年間、一度も箱根に行ってないと。

堤　田中清司（教育・日大二高）さんとか、中距離の人が出てる時代だね。走ってるときに交通事故に遭っている。警備もいい加減だった。

西川　田中さんは、１５００㍍の選手だったけど、私と同期の石田寿彦（政経・茨木高）は４００㍍の選手。そんな選手が出ている時代だからね。中大の全盛期で全く歯が立たない。私は、４年間、毎年行きましたよ。１年のときに、田古島浩さんから、体育局のバスが出るから乗らないか、と誘われたんだよ。何ヵ所か停車して、応援するんだけど、早稲田はなかなか来ない。寒くて、震えてたという記憶がある。最近の正月の陽気を見ると、温暖化が進んでいるのがよくわかる。

江口　ラグビーだって、マイナー。観客は早明戦でも４０００人いかない。対抗戦の招待券はラ式蹴球部から何枚かもらえたけど、部員で行く人はほとんどいなかった。

中津海　ラグビーは2部だったよ。

堤　知恵者がいて、対抗戦グループと新興のリーグ戦グループに分けちゃって。早稲田も大西さんが監督になって、すぐに立ち直っている。

江口　6連戦以外で、最も印象に残った試合あるいは選手を挙げてもらえますか。

中津海　試合ではないけど、1年のとき、ワンダーフォーゲル部の春合宿に同行取材したことかな（3泊4日）。山好きの私には、たまらない経験だった。一瞬、この部に入っちゃおうかと思ったくらいだよ。

堀　卓球の木村興治選手が印象に残ってますね。いい選手だった。1年上だったけど、親しくなって、インタビューもさせてもらった。強かっただけでなく、好男子だったね。世界選手権の混合ダブルスで、世界チャンピオンに2回なった。木村・伊藤和子組、木村・関正子組。

江口　伊藤和子選手は、我々の頃、体育館に来て、早稲田の男子選手を相手に練習してました。

堀　体育館にはマスコミのほか、卓球ファンと思われる人が見に来てたよ。当時では珍しかった。

江口　木村さんは、のちに「早稲田スポーツ」の取材で、「マスコミに取材されたことより、学生のスポーツ新聞にインタビューされたことのほうがうれしかった」と、語っていますよ。

堀　学生記者冥利につきるね。担当の相撲では、新保茂（１９６１年第39代学生横綱）も印象深い。

堤　部室の階段を下りたところが相撲道場で、練習は見てたよね。新保は、福岡県の郷里で家業を継いでいたけど、オートバイで買い物に行く途中、交通事故で亡くなった（１９８４年、42歳）。

中津海　安部球場のそばに下宿してたんじゃないかな、あのへんで会った記憶がある。

堀　早慶戦特集号で，ＯＢにインタビューする企画があって、慶応ＯＢの佐々木

信也に早慶戦の話を聞くことにした。銀座の資生堂パーラーに来いと言われ、私はてっきり資生堂だと思って行ったけど、どこにいるのかわからない。だいたい、資生堂パーラーがあることすら知らない。それで、うろうろして、ものすごく遅刻してしまった。忙しい人だったのに、えらく迷惑をかけた思い出がある。ハンサムで、慶応ボーイの典型のような男だった。

斎藤　堤さんの書いたものを読むと、佐々木選手はプロでも活躍してるんですね。早く、引退するような人じゃなかった。プロ1年目で、3割近く打っている。

堤　早慶戦特集号に佐々木信也のインタビューが、確かに載ってるよ。佐々木信也は湘南高校の1年のとき、夏の甲子園で優勝している。一つ上が高野連会長をやった脇村春夫さんで、その上が優勝投手の田中孝一。早大で石井連蔵キャプテンのときのマネジャーだ。佐々木信也のお父さんが監督だった。

中津海　今では、湘南が優勝するなんて信じられないよね、

堀　慶応で三冠王になった衆樹資宏も湘南だった。エースで四番。

堤　1年生の5月、関東インカレの取材で、国立競技場に行って、４００メートルハードルの飯島恵喜（１９６１年教育卒・銚子商）さんを見たときの印象は強かった。関東インカレを2連覇している。でも、スタンドはガラガラだった。飯島さんは日本インカレでも勝っているし、いつも1着というイメージしかなかった。その次がアメラグの早慶戦だった。早稲田は人数がいなくて、攻撃も守備も出ずっぱりなんだよ。慶応にキックオフリターンタッチダウンなんかやられて（笑）。すぐに5号には原稿を書いた。

江口　私の頃まで、アメフトじゃなく、アメラグって書いてた。堤さんが最初に書いたからですかね。

堤　当時は、アメラグって言ってたよ。

中津海　野球部でセンターだった直江輝昭（米子東）が、神宮でフェンスに激突して、重傷を負ったけど、奇跡的に助かったことが印象に残るね。あの頃の外野フェンスはコンクリートで、飛び越えられそうなくらい低かった。直江の事故の

あと、フェンスをより安全にすべきだという声が大きくなったのは、失礼な言い方だが、直江の「ケガの功名」かもしれない。だけど、ラバーフェンスにするまでに、何年もかかってるから、危機管理がなってなかったよ。

斎藤　川に飛び込んで亡くなられた。

中津海　住金和歌山に就職して、野球を続けていたが、練習が休みの日に川に飛び込んで、頭を岩にぶつけてね。彼と仲良くて、キャプテンの三原啓治（松商学園）、直江、江尻亮（日立一高）たちとよく、飲みに行きましたよ。金をだれが出したか覚えてない。それと、ボクシングが強くて、白鳥金丸（青森北斗高）は20秒足らずで勝ったことがある。ボクシングはよく見に行った。宇野千里（船橋高）マネジャーは、1回だけ選手として出て、勝った。今でも宇野は、全戦全勝（1戦1勝）の笑い話になると、うれしそうに照れてる（笑）。印象に残ってる選手はそのくらいかな。

堤　あの時代は、ボクシングの早慶戦はやってないね。

中津海　相手にならなかったし、危険でしょ。

今は日吉と早稲田で、交互にやっていて、日吉のときに見に行くけど、昨年は、7階級を戦って、全部負けた。全盛期を知るものにとっては、驚き以外なにものでもない。

堤　印象深いといえば、日吉から慶応のバスに乗せてもらって、神宮までのルポをやった。車中はタバコの煙がムンムンしていて、早稲田では考えられない光景だった。でも、今、慶応はバスがないんだって。神宮球場で現地集合・現地解散。チャーター料を出す金がないとか。

中津海　昔の「早スポ」みたいだ（笑）。

斎藤　東大もないでしょ。道具だけ車で運んでる。

江口　70周年のときは、たぶん、健康管理をしっかりしてる堤さん以外、みんな生きてないからね（笑）。これが最後の座談会。

堤　松井さんは、50周年はいないからと言って、ほんとに亡くなっちゃった。な

んでも、せっかちなんだ。そして、不可能に思えることでも突き進んで、成し遂げてしまう。それで、我々がつけたアダ名が「ナポレ松井」。

「余の辞書に不可能という文字はない」のナポレオンです。「やればできる」の精神で、お金がなくてもやる気さえあれば、必ず目標は達成できると、部員にハッパをかけた。松井さんの掲げた理想の新聞ができているかどうかはわからないけど、ここまで続いてきたことだけは、ほめてくれると思います。

Sayuri Yoshinaga

早稲田スポーツ新聞
創刊40周年 おめでとうございます。

最近のワセダのスポーツは辛いものがありましたが、春は六大学野球で久しぶりに優勝 ― とても、とても嬉しかったです。
今シーズンはラグビーも駅伝も精一杯頑張ってほしい。そして早稲田スポーツも派手なお祝いの記事を書いてほしい。そんな思いで一杯です。

フレーフレー、ワセダ！
フレーフレー、早稲田スポーツ新聞
1999年10月30日　吉永小百合

創刊40周年のとき、「早稲田スポーツ」に寄せられた吉永小百合手書きの祝辞（自家製便箋を使っている）。毎日新聞で彼女の連載を担当していた堤が、依頼した。